

自由南アフリカの声

1999年6月

No.20

Voice of Free South Africa

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

1999年6月の報告

- 2月にハウテン州教育局への本 7,588 冊送付
- 3月にハウテン州教育局で移動図書館開始
- 5月に西ケープ州マシフンディスへ 6,151 冊送付
- これまでに総計 15 万 4,110 冊
- 車2台輸出手続き中

目次

| | |
|------------------|---|
| 21世紀における南アフリカの役割 | 2 |
| タウンシップの住宅事情・二景 | 2 |
| 南アフリカ便り | 4 |
| ジョバークの路上に生きて | 4 |
| ボランティアの値段 | 6 |
| 朝日新聞記事 | 7 |
| ビールド紙記事 | 8 |
| プレトリアニュース紙記事 | 9 |



移動図書館車に集まる子どもたち デベトン 1999.1

21世紀における南アフリカの役割

東久留米インターナショナルスクール物理教師ジンバブエ出身 **サジ・マランガ**

ついに21世紀到来です。眠れる巨人であるアフリカは、休眠からゆっくりと起きあがっていますが、いまだに飢餓、戦争、病気、無学といった問題と戦っています。教育や交通、保健のシステムは効率的に機能していません。21世紀に入って、私たちは希望が持てるのでしょうか。

植民地主義は今や過去のものですが、アフリカは過去の植民地支配から受け継いだ悪魔を払い落とすことができませんでした。「新しいリーダーたち」は無神経に、どん欲に、このシステム上の悪魔を存続させ、アフリカ諸国の経済を枯渇させてしまったのです。

独裁主義や軍事政権が台頭しました。国家予算は、不健全な派閥政治を存続させる道具となったのです。政府は実際的な将来の計画を立てることができませんでした。アフリカはリーダーシップの危機に悩まされていたのです。アフリカ大陸を未来に導くための想像力が欠乏しています。

南アフリカが独立し、マンデラ大統領は希望と和解の精神をよみがえらせました。変化の翼が風に吹かれて、南アフリカに繁栄と平和がもたらされるかもしれません。南アフリカは、私たちの最後の望みの綱なのです。もし、南アフリカが他のアフリカ諸国から学び、アフリカの富を奪った暴力を避けることができれば、南アフリカはその例を示すことによってリーダーになれるでしょう。

人々は、自分たちの生活を変えることに関しては、政府の力に対する信頼を失っています。本当の変化とは、個々人がコミュニティの生活を変えていくことで、コミュニティ内部から起こる変化のことで。このため、政府よりも、地元のコミュニティと共に働く非政府組織のほうが、貧困の境界線上に住む多くの人々の生活に、大きな影響を与えます。NGOのほうが住民の当面のニーズに、良く気がつく場合が多いのです。

生活の多くの局面で必要なことがあります。南アフリカでは教育が最も必要とされています。南アフリカの人々は、教育を受け、自分たちの生活に責任を持つように学んでいかなければなりません。しかし、地方では設備が限られています。TAAAはこのような地域のニーズを認識し、それに応えるアクションをすることで、リーダーシップをとってきました。あなた方が植えている種は、芯を形成します。芯から本当の自分が育つのです。

南アフリカは、失敗することを許されません。この国は、我々の将来の希望なのです。「アフリカに神の祝福あれ。その名声と尊敬の高まらんことを」これは南アフリカの国歌の一部で、国民の希望や夢を表しています。

みなさまが、アフリカがこの夢を叶えるための支援をしてくださっていることに感謝いたします。アフリカを21世紀に導くための、みなさまのご協力に本当に感謝しています。(久我祐子 訳)

[2月に浦和で行われたTAAA報告会での講演より]

タウンシップの住宅事情・二景

ケープタウン在住、地元NGO・AIDC*に勤務 **福島 康真**

ケープタウン市内から車で10分のところに、ランガというケープタウンで最も古いタウンシップがあります。街の中心部から高速道路のN2に乗って空港方面に車を走らせ、火力発電所を通り過ぎると、ランガと書かれた道路標識が見えてきます。そこで高速を下りると、もうタウンシップの中。むき出しの地面とわずかな緑、ポップな絵が描かれた塀の中には小さな家が並んでいます。さらに車を進めると、四階建てのホステルがずらりと並んでいる場所に出ます。日中からたくさんの人が行き交う典型的なタ

ウンシップの雑踏は、わずか10キロしか離れていないヨーロッパの香りのするシティ・センターとは全くの別世界です。

ホステルのすぐ横で公衆電話屋を経営しているのが、アジア・アフリカと共に歩む会とも協力関係にあるNGO「Masifundise」と一緒に開発プロジェクトを行っている住民団体のリーダーです。彼はコンテナを改造し、その中に電話5、6台置いて商売をしているのですが、次から次にお客がきて結構繁昌しているようでした。

彼は、このコミュニティの生活状態はほとんど変わっていないと言います。・・・政府は変わったけど、見ての通りの貧困がまだ続いている。となりで女性が果物を売っているが、一日店を開いていても、収入はほんのわずか。ここにずらりと並んでいるホステルは40年前に軍隊が建てたバラックで、結局軍隊は一度も使うことなく去っていった。それ以来、住宅として使われているが、その環境は以前とまったく変わっていない・・・。

彼に、ホステルの中を見たいのだけとお願いすると、「じゃあ一緒に行こう」と、となりのホステルを案内してくれました。まず一歩足を踏み入れて感じたのは、暗い。まん中の通路を挟んで左右に部屋がズラリと並んでいるのですが、昼間なのに通路は真っ暗。部屋のドアが開いていたので、中を覗いてみると、3メートル四方の部屋にベッドが二つ。彼によると、この部屋には二家族が住んでいて、こんな部屋がこのホステルには50近くあるとか。通路の真ん中あたりに、洗面所兼トイレ兼シャワー室があるのですが、洗面所といっても、たった二つの蛇口と流ししかなく、トイレは衛生状態がひどく悪く、シャワー室にはシャワー口がいくつかあるものの水は出ない。州政府によってシャワーの水が止められたのだと言います。じゃあ、どうやって身体を洗うのかというと、数カ月前に近くに新しいシャワー・センターが建てられ、みんなそこに行っているというのです。

ホステルの横にある広場の一番はしに真新しい建物が立っていて、それがシャワー・センターです。白と青に塗り分けられた建物は、一見コミュニティ・センターのように見えますが、男性用と女性用に分かれた入口を入ると、シャワー室のドアがいくつか並んでいて、いくつかの部屋にはバスタブもあります。建って間もないこともあってか、なかなか清潔で快適そうなのですが、一人50セントの入浴料を払わないといけないというのです。劣悪な環境に住まざるを得ない低収入層の人から、さらに金を取る・・・ホステルのシャワーの水が止められたのは、なるほどそういうことだったのかと、あこぎな州政府のやり方には腹が立ってきたのですが、州政府には彼らなりの理由があるのかもしれない。

* * *

ケープタウンから車で1時間半のところ、鯨ウオッチングで有名なヘルマナスという小さな別荘地があり、その脇に、約2万人の人々が住むタウンシップ・ツェリヒレがあります。ここの住民団体も

「Masifundise」と一緒にプロジェクトを行っており、企業と交渉して寄付を得て、コンテナを基礎にした立派なコミュニティ・センターを建てて事務所を構えています。彼らのプロジェクトの一つに、タウンシップ・ツェリヒレがあります。これは自分たちの住

むタウンシップの実情を知ってもらおうと同時に、世界中の人と交流することを目的としたものです。

ツェリヒレ・タウンシップ・ツアーという名のこのツアーは、ヘルマナスの街やビーチ、アフリカ人たちが強制移住させられた場所、デクラーク元大統領の生家などを見た後、タウンシップを訪問し、RDPハウスに案内してくれます。

RDPハウスというのは、マンデラ政府が誕生した時の目玉政策・RDP（復興開発計画）によって建てられた住宅のことです。RDPは、住宅建設、雇用創出、教育の無償義務化などを積極的に行い、アパルトヘイトの残滓を一掃しようという政策ですが、3年前に全国事務所が閉鎖されて以降、その動きは鈍くなっており、現在では「資金不足」を理由にあまり積極的には行われていないようです。

しかし、鳴り物入りで登場したRDPの住宅政策だけでなく、果たしてどんな家なのかと想像していたら、その小ささには驚くばかり。4メートル×5メートル四方のむき出しのコンクリートの家の中には、小さな流しが一つあって、そこが台所。部屋の端にはバス・ルームがあり、ベッドやソファなどを置くと、もう動くのが難しい程です。そこに一家族が住んでいるのですが、詰め込まれていると言った方がピッタリです。

住んでいる人の話によると、収入が少ないので無償で家に住めるようになったが、電気はまだ来ておらず、水道代はやたらと高い。一番の不満は家が小さ過ぎることで、住む人のことを考えずに家が建てられている。しかも、一度RDPハウスに入ると、引越すればもう二度と他のRDPハウスには入れない。死ぬまでここに住まないといけないう・・・。

RDPハウスは地域、州によって、あるいは建てられた時期によって、いろんなものがあるのですが、ヘルマナスのものと同様大差はないでしょう。果たしてこういった家が「人間的で最低限の生活」を保証しているのかどうかは、大いに疑問があります。

* * *

1994年の全人種参加選挙から5年。大多数の人は、今なお厳しい生活を強いられています。どうしたらこの状態が変わるのか、それはいつなのか・・・
6月2日に行われる二回目の全人種参加選挙は、一つの大きな節目になることは間違いないでしょう。

*A I D C =

Alternative Information and Development Centre

(お詫び:会報 No. 19のp. 3で福島さんのお名前に誤りがありました)

南アフリカ便り

一朝からコーラのズールランドの休日ー

ユネスコ職員 菊川 穰

皆様はじめまして、前回のニューズレターでの古我さんの記事に話題になっていました、ユネスコ(国連教育科学文化機関)プレトリア事務所で国際公務員として働いております菊川と申します。久我さんから、是非南アでの生活に関する記事をという要望にお答えしまして、今回レポートを書かせて頂いております。今回は4月上旬のイースター休暇で訪ねたズールランドでの体験を報告させていただきます。

ここ南アでは多くの方がキリスト教徒のため、4月上旬のイースターは4連休になります、まあ日本と言うゴールデンウィークのようなもので、皆旅行に行ったりします。そこで、私は、スワジランドの国連人口基金に赴任される直前の日本人の友人と、ベルギー人の同僚と共に、同じく事務所の同僚である南ア人女性の実家、親戚めぐりの旅行に出かけました。

彼女の故郷は、ズールランドと言われる、南ア南東部に位置するクワズールナタール州の一部で、モザンビークとスワジランドに囲まれた、それは自然の豊かなところでした。伝統的なズール人の村、象やライオンの出会える自然保護区、ボートからカバやワニに出会える海沿いの湿地帯、それはそれは美しいところなのですが、そこで経験したお話を少し…。

友達の親戚や家族はそれこそ盛大にめずらしい日本人やベルギー人を歓迎してくれたのですが、面白かったのは食事で、伝統的なズール地方の料理が出るのかと思いきや、毎日、Braaiと呼ばれるオランダ系白人であるアフリカーナ人の伝統料理であるバーベキューなのです。来る日も来る日も、お肉、ソーセージのオンパレードで、飲み物はもちろんコーラでした…。

比較的裕福な家でも、電気も水道もない山間部の家でも、ずーっとバーベキューとコーラでした。笑えるのは、インド洋沿いの海産物が山ほどとれる地域でも、バーベキューのおかずは、お肉とソーセージのみ、ズールの伝統的なとうもろこし粥の朝ご飯でも飲み物はコーラだったのです。まあ、コーラは衛生上安全なため、途上国一般では異常にポピュラーだったりしますが、本当に皆コーラかせいぜい人口着色料いっぱいジュースしか飲まないのです…。美味しい、パイナップルやマンゴがいっぱい取れるにもかかわらず…。

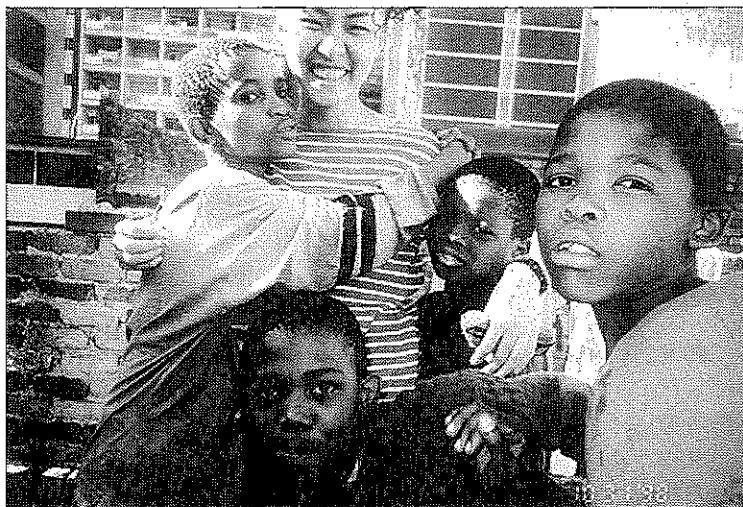
単なるアメリカナイズという表現ではすまされぬ、何かを感じたのですが、それが何なのかはまだ良く分かりません。ただ、良く聞く話では、南アの黒人の料理は、他のアフリカ諸国に比べてあんまり独自性がないと言われていたようです。プレトリア等にあるアフリカ料理屋さんに行っても、これはエチオピア、これはマラウイ等々とは聞かれますが、これはズールというのはいささか聞きません。全体的にも食べることにあまり感心がないようにも思われますし…。

しかし、あんなに海産物に恵まれ、年中果実が実る土地なのに、なぜバーベキューとコーラ??と思ったのは私だけではないようです。

それではまた、南ア便りを送らせて頂きます。

ジョバークの路上に生きて

早稲田大学4年・TAAA会員 千葉愁子



千葉愁子さんと子どもたち
(文中の子どもたちとは関係ありません)

私は、去年の7月から8ヶ月間、アメリカのNGOからジョハネスブルグ(ジョバーク)の現地NGOに派遣され、ストリートチルドレンやホームレスユースと呼ばれる路上で暮らす子ども達や若者と共に働いてきました。私の活動の拠点となったのは、ジョバークの町中からほど近いヒルブローウとヨービルと呼ばれる地域です。大都会ジョバークには、家庭で虐待されて、親がアルコール中毒で、あるいは家が貧しくて等々様々な理由から家を出た子ども達が全国から集まっています。

ヒルブロウでストリートチルドレンと働いている、私がそう言う度に現地の南ア人は一様に眉をひそめました。「あんな治安が悪いところ私はごめんだわ」「あの犯罪者達はもうどうにもならないよ」現在世界一治安が悪いと言われるジョバークの路上を生き抜く彼らは、人々の恐怖や蔑み、また敵意の対象です。

私はそれに対して、「いや違う。彼らは本当にただの子どもで全くの無害です」とは言えません。しかし、「ちょっと待って」そう言いたいのです。犯罪者集団と恐れられる彼ら一人一人の横顔を見ていたら、一人一人を理解しようとしたら、果たしてそこに見えるものは同じでしょうか。

“Lions don't cry” 「俺達ライオンにはこんなどうってことないさ」同性愛者の男性に引き取られたテンバは自分のことをライオンだと言います。「新しい学校に新しい洋服。何だって手に入れたけれど、僕はいつだってあいつに何かしなきゃいけないんだ。何も知らずに僕に良くしてくれる奥さんと子どもに申し訳なくて、いつもお酒を飲んで酔っぱらっていたよ」「ジョバークの路上で生き抜くためにはライオンの皮を着なきゃいけないんだ。優しい心を持ったやつほど、大きなライオンの皮をね。でも気づいたら、ライオンの皮はぴったりと身体に張り付いて二度と脱げないんだ」そう言って力無く笑った彼は、昨年6月にかっぱらいをやめ、現在はその男性の家を離れて、路上で車を洗ってお金を稼ぎながら暮らしています。

モザンビークから来て路上に暮らす不法移民のマイケルもまた、テンバ同様同性愛者の男性に養われた一人です。ジョバークには彼らのように、自分たちの躰を売ることによって衣食住を手に入れざるを得ない子ども達がたくさんいます。マイケルは言います。「ジョバークはクソみたいな所だよ」「うっかりするとぼこぼこに殴られている誰かの姿が目に入ったりするんだ。そんな時はいやなもの見ちゃったなってすぐに忘れることにしてるよ。そうしないとここでは生きていけないからね」犯罪事には一切手を出さない彼も、ジョバークに蔓延する暴力には無抵抗でした。

ある時、彼の大親友のジャブが他の友達に騙されて逮捕される事件が起こります。本来一番最初にジャブを見舞うべきマイケルですが、その腰は重く、1ヶ月を過ぎても1度も刑務所を訪れません。とうとう裁判当日になってしまい、にもかかわらず仕事の夜勤明けだと言って私の前に現れた彼はよれよれのジーンズ姿でした。裁判に来るのも来ないのも、またどんな服装で裁判所に現れるかも、全ては彼の自由だと思った私は「9時にヒルブロウ裁判所で」とだけ言ってその場を立ち去りました。しかしそう言ったものの、マイケル来るのかな、もし来てくれればジャブにとってはいい励ましになるんだけど、でも着たとしてもあんなよれよれのジーンズ姿

では裁判官のジャブに対する心証を悪くするかも、と心配事はつきません。「シュガー（彼らは私をこう呼んでいました）」8時55分、誰かが私の名前を小さく呼びました。振り返ると、そこにいたのは、誰かに慌てて借りたのでしょうか少し大きめのスーツに身を包んだマイケルでした。弁護士や検察官の人混みにちょっと緊張しちゃったよと笑いながら、「今までジャブのためにいろいろとやってくれてありがとう」と私に頭を下げ、彼は飴をひとつ差し出しました。「今日くらいはあいつのために俺もびしょと決めないとね」

傍聴席にスーツ姿のマイケルを見つけたジャブは大喜びです。「すごいよ。俺にとって一番大事なシュガーとマイケルが、2人ともぼっちりスーツで決めて来てくれたんだぜ。この俺のためにだよ」ジャブを知る者は皆をそろえます。「あいつは犬だよ。生まれながらの犯罪者なんだ」そしてジャブの母親も言います。「ほらね、シュガー。私の言ったとおりだろ。あの子はいつか刑務所に行くって」しかしそんな彼も、裁判所で両手首に手錠をかけられた時には、がっくりと肩を落とし涙を流しました。刑務所でも、むしろ刑務所暮らしを楽しんでいるかのようにさえ見える他の犯罪者達に比べ、彼は頭を下げて背を丸め、一回りも二回りも小さくなったかのように見えました。

この事件が起きる前、ジャブが私に言ったことがあります。「もう犯罪からは足を洗って将来のために歩き出すことに決めたよ。そしててっぺんまでたどり着いたら、仲間を引っ張り上げるんだ。俺達もやればできるんだってことを証明してね。今は自分のことで手一杯だけど、いつか俺があいつらを引っ張り上げる」彼は、いつからかコントロールがきかなくなってしまった自分の人生を取り戻すための確かな一歩を踏み出していました。しかし今回の事件で彼は言いました。「シュガー、俺の人生なんて結局二度と変わらないんだよ」そして無罪放免の後、昔の仲間のもとへと戻っていったのです。

「くそみたいな所だ」去っていくジャブを見ながら、私はマイケルのその言葉を思い出していました。いつか引っ張り上げたいと言っていた友達によって潰されたジャブの努力、そして彼が受けた仕打ち、これから彼が歩むであろう人生、全てが悪夢のように私の頭の中を頼りなく回っていました。「これがギャングの生活なんだ」ジャブの最後の言葉です。私にはあまりにも不条理に見えるこれらの出来事も、路上で暮らす彼らにとってはある種受け入れざるを得ない日常の一コマなのです。しかしそこには、19才の青年が受けとめるにはあまりにも大きすぎる絶望と暗闇がありました。ある若者が言いました。「犯罪者は生まれるんじゃない、作られるんだ」この言葉と“Lions don't cry” この2つの言葉の向こうに見える彼らは、本当にただの犯罪者集団でしょうか。
(文中の名前は仮名です)

ボランティアの値段

TAAA副代表 浅見克則

木漏れ日の差し込むサンルームでぬくぬくしながら夢を見た。

THE AMERICAN COLLEGE DICTIONARYに拠るとVOLUNTEER = one who enters any service of his own will. とあり『自発的』である必要はあるかもしれないが、必ずしも『無償』でなければならないとは明記されていない。しかし日本人の潔癖性は世界に冠たるもの(その割に汚職が多いのは何故?)。一般の日本人、特に全くボランティアに関心を持たぬ人ほどボランティアに対するクリーン度の要求は高い。因みに広辞林は『篤志奉仕家』とわけのわからん訳し方をしている。

当会、TAAAは極端なくらいにクリーンに運営されている(当事者が言っていれば世話はないか...)。パッキング作業に参加しているメンバーはご存じの通り、昼食は手弁当(と言っても、通常野田代表がバイクでひとつ走りホカ弁を買い込んできてみんなに売る。この際、殊勝にも会の窮状を知っている各メンバーは多めに出してお釣りを受け取らない)。勿論、集まってくる交通費も各自負担。これだけクリーンにやっているのだから今までの活動を金に換算したらどうなるか?近江商人も真っ青のエゲツない試算をしてみても罰は当たるまい。又、時として、古本と中古車を苦勞して送るよりみんなでその労力をアルバイトに振り当て、稼いだ金を送ったほうが効果的ではないかという邪念に捕らわれることがあるが(そんなの俺だけか...?)、その疑問にも応えるべく勇躍、以下の試算を乱暴にも試みた。

A 本の値段

この5年間で送った本がざっと15万冊に達した。300~400円のペーパーバックから万単位はしそうなBRITANICA迄。特に近年多いAMERICAN SCHOOLの教科書は1冊3,000円はしそうだ。エイヤツと1冊2,000円としてしまおう。古本屋に持っていけば二束三文だろうが、中身は新本でも古本でも価値は変わらない。従って本だけでも何と

$$150,000冊 \times 2,000円 = 300,000,000円 \dots ①$$

(3億円)

B 移動図書館の値段

来年度の予算に計上されている10台目の車まで勘定に入れると車の程度、価値の算定は全く無視して、4,000冊積載車で1,000万円と仮定すると(大体そんなもんと以前聞いた)

$$10,000,000円 \times 10台 = 100,000,000円 \dots ②$$

(1億円)

もちろん日本で10年も使われて査定額は0円の車だから新車とは比ぶべくも無いが、実際まだまだメンテナンスさえしっかりすれば更に10年の使用に耐えられる。そう考えれば新車と同じだ。

$$① + ② = 4億円!!!!!!!!!! (5年間) \dots ④$$

C アルバイトで稼げる金額

さあここでメンバーに月1回(現在の作業日か約月に1回)。更に不定期にアルバイトをして貰おう。能力、体力、資格、学歴、職歴の差は全部無視して全員でハンバーガー屋で働くこと仮定して時給は750円。月1回の作業参加者は多くて10名、少ないと3~4名。平均して6名というところか。

従ってコンスタントな収入は

$$750円/h \times 8時間 \times 12ヶ月 \times 5年 = 2,160,000円 \dots ⑤$$

その他に事務的に費やす労力や、本の回収に少人数で出かける労力をまたまた乱暴に⑤の半分とする

$$⑤ \div 2 = 1,080,000円 \dots ⑥$$

$$⑤ + ⑥ = 3,240,000円 \dots ⑦$$

結論が出ました。

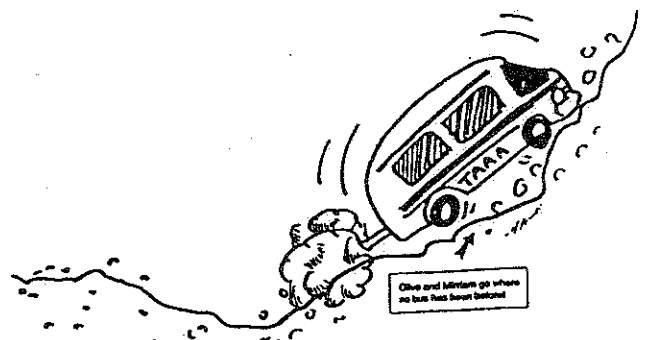
この会が現行の方針で活動をしてきた成果は他の方法に比べて

$$④ - ⑦ = 399,676,000円 / 5年間$$
$$= 79,935,200円 / 1年間$$

に匹敵する。この数字は誇れる。

この数字を胸に畳んでTAAAの継続に尽力しようと思意したところで目が覚めた。

あつ、夢か……。



ELETの移動図書館のポスターより

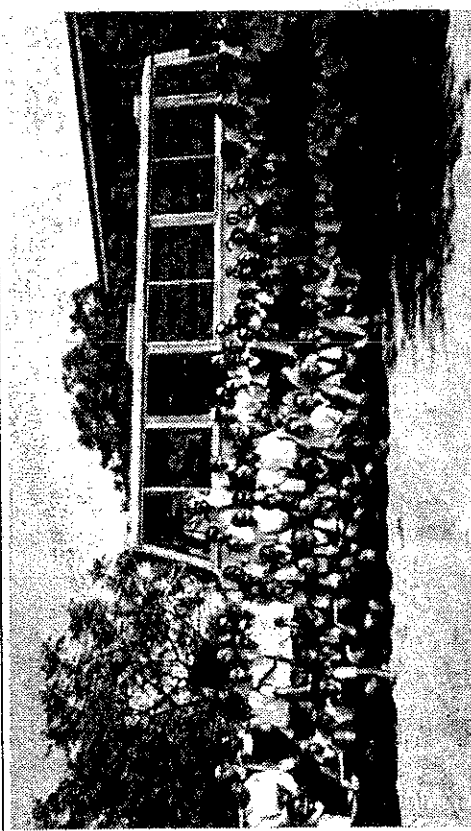


日本からおくりられた英語の本を読む南アフリカの子供たち

南アの子どもらにもっと英語の本を

南アフリカの子供たちに、使われなくなった英語の本や教科書、廃置になった移動図書館をおくり、教育の現場で再利用してもらおう活動を続けているボランティア団体「アシア・アフリカ」が、来月全米が運動への新たな参加を呼びかけている。同会の野田千香子代表によると、これまで六年半の間に送った本は十四万冊、移動図書館は八百になるという。

「アシア・アフリカ」全米呼びかけ 移動図書館も8台送る



第3種郵便物認可

南アフリカに贈られた移動図書館／写真提供：いづれも野田千香子さん

きっかけは一九九二年春、東京のアフリカ民族会議(ANC)事務所で行っていた野田さんが、南アフリカのマンバリーからシボラに参加のために来日した女性活動家と知り合い、女性が手に職をつければおちに使ってもらえるのをねがってほしいかと頼まれたこと。

学習塾で英語を教えている野田さんは、外国にミシンを送る時、こん包を置き場の確保、輸送に伴う複雑な手続きが必要なることを知っていた。このため、「英語の教科書が必要ではないか」と現地を打診したところ、先生を対象に教育指導をしているNGO団体が英語の本を求めていることを知り、連絡をとって本を送り始めた。同時に日本で廃車になった移動図書館をおくり、図書館のない学校や遠隔地を巡回し、教員らへの図書貸出しに役立ててもらっている。

野田さんはこれまで五回現地を訪れ、日本からおくりた本や車が使われている現場を観察した。ダーバンの黒人初等学校では、先生が英語の本に登場する人物や重要な場面を一枚の大きな紙に描き、黒

板に張り出して、生徒たちにその絵からあらすじを予想させ、最後に先生が物語を朗読する授業を行っている。授業が始まる前、日本からの訪問者を物珍しげにちかかっていた子供たちは、先生が英語の物語を読み聞かせる時、一言一句聞き漏らすまいと真剣なまなざしを教師に向けた。

受験勉強を強いられ、とすれば、学ぶことの楽しさを忘れてしまいがちな日本の子供たちと比べ、ノートも鉛筆もない裸足の生徒たちの学ぶことへの意欲、真剣な心が新鮮にうつったという。

野田さんは、アパルトヘイト政策が廃止された後も依然として、黒人が教育を受けられる機会には不平等さが残っていると指摘、「勉強したい、本が読みたい」という子供たちの声に地響き活動でこたえたいと言った。同会では使われなくなった英語の小説や、本などを輸送する寄付金を受け付けている。問い合わせは与野市大石五の二七一。電話048-8822-8271。

Donderdag 28 Januarie 1999



Me. Mary Metcalfe, Gautengse LUR vir onderwys, by een van die busse wat geskenk is en in die toekoms as mobiele biblioteek vir agtergeblewe skole gebruik gaan word.

Foto: LEON BOTHA

Gautengse skole kry 3 mobiele biblioteke

Alet Rademeyer

Die Gautengse onderwysdepartement het gister drie busse van R300 000 in ontvangs geneem wat voortaan as mobiele biblioteke vir agtergeblewe hoër en laer skole in landelike gebiede gebruik gaan word.

Me. Mary Metcalfe, Gautengse

LUR vir onderwys, wat dié skenking in Pretoria in ontvangs geneem het, het gesê 'n mens vermeerder net kennis, en veral kennis van 'n taal, deur onder meer bate te lees.

'n Wêreld van inligting sal deur hierdie projek vir sowel leerlinge as onderwysers oopgaan.

Metcalfe het ook 'n beroep gedoen op die gemeenskap om boeke

wat in hul huise rond lê en nie meer gebruik word nie vir die doel te skenk.

Die drie busse, afkomstig van Japan, is geskenk deur die Together with Africa and Asia Association (TAAA). Die busse is toegerus met boeke, kassette, handpoppe en studiemateriaal wat gerig is op die Kurrikulum 2005-onderwysmodel.

Die mobiele biblioteke-projek

word deur die biblioteek- en inligtingsdiensafdeling van die onderwysdepartement gekoördineer. Al die skole wat nie oor biblioteke, riëwê beskik nie, sal op 'n gereelde grondslag bedien word. Die boeke sal op 'n uitleengrondslag aan skole beskikbaar gestel word.

Agtergeblewe skole sal ook boeke ontvang wat onder meer deur Amerika en Brittanje geskenk is.



James Maseko, superintendent-general of the Gauteng Department of Education receives mobile libraries from Katsumori Asami, vice-president of the Together with Africa and Asia Association. PICTURE: KENDRIDGE MATHABATHE

Three mobile libraries donated to GDE

Thousands of pupils from disadvantaged areas will now be able to get hold of adequate reading material, thanks to a donation of three mobile libraries.

The libraries, in the form of three buses each valued at R100 000, were donated by Katsumori Asami, vice-president of a Japanese based group, Together with Africa and Asia Association,

to the library section of the Gauteng Department of Education.

The mobile libraries are stocked with text books, reading material depicting various cultures, works of fiction and music books.

Accepting the donation, Mary Metcalfe, Gauteng MEC for education, said pupils hungry for education would benefit from the services

provided by the mobile libraries.

Ms Metcalfe said pupils would not be the only ones to benefit, teachers would be able to gain something. "Some of the books will help teachers with additional material which in turn will enhance the quality of teaching."

"A wide range of reading material in line with Curriculum 2005

will be available for the tutors."

Sybilla Hiltzinger, of the education department, said there was a commitment to a culture of reading and the mobile libraries would be a step in the right direction.

She said so far the libraries had received about 90 000 books from organisations in the US and 15 000 from the United Kingdom.

Jeremy Webb, of Bedfordview Rotary Club, said a donation of 1.5 million books had been made to Gauteng libraries and urged private companies to donate books.

"We are aiming to donate 3-million books this year," said Mr Webb.

A decision will be taken soon on where the buses will be stationed. - Staff Reporter